

平成 26 年度 卒業式式辞



本日、学士の学位を得た 922 名の学部卒業生の皆さん、修士の学位を得た 213 名の大学院修士課程修了生の皆さん、博士の学位を得た 6 名の博士課程修了生の皆さん、そして 6 名の特別支援教育特別専攻科修了生の皆さん、おめでとうございます。

御来賓の本学後援会の原会長ならびに本学同窓会の宮崎会長、そして列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いをいたします。併せまして、ご家族あるいは関係者の皆さまにも、心からお慶びを申し上げます。

さて、本日卒業の学部卒業生のほとんどは、東日本大震災直後の 2011 年 4 月に入学された皆さんです。3・11 震災翌日の 12 日の後期入試を受験し入学された方もおられます。11 年 4 月 5 日の入学式には、参加できなかった被災地からの大学院入学生もおられましたことを思い出します。4 年前の震災、そしてその後の見聞は、皆さんの胸の中にとどのように刻まれているのでしょうか。

大震災直後の入学式で、私は以下のようなことを述べました。

「今我々が直面している震災は、これまでの豊かさ、その前提としての安全という人間の生存の基本を問い直し、これまでの新たな社会への『模索』ではなく、新しい社会を『創造』することへの決断を迫っています。その意味では、皆さんのように過去の成功物語にとらわれない世代、『模索』の時代に育った世代こそ、過去を根本的に見直し、『未来の希望』を実現できる世代である」と、皆さんへの期待を述べました。そして新入生である皆

さんに、四つのことをお伝えしたのですが、その第一に挙げたことは、「まずは自分の人生の幸福とはなにかについて、深く考えて頂きたいと思います。自分を考える、そしてなにが幸福なのかを考える、これを自分で考え、友人と語り合っ頂きたいと思います。そして自分の幸福が、他者の幸福と通ずる生き方を確立して頂きたい」ということでした。

2011年8月、2回にわたって被災地・岩手・陸前高田へボランティアバスを送り出しました。この被災地での経験の中で、自分の人生の課題をみつけ継続的なボランティア活動に取組み、また意欲的な学びに取り組んだ方もいます。一方、被災による学びの困難に思いをはせながら、学ぶ条件に恵まれていることを自覚し、自らの生きている時代と社会の課題に対して、社会的実践ではなく、理論的学びに励んだ方もいます。それぞれに被災地・社会の課題と向き合い、他者とともにある自分の幸せを追求した学生生活だったのだと思います。また2012年2月には、本日卒業する約20人がタイへの派遣プログラムに参加しました。彼らは、日本とは異なるタイの諸困難に出会い、自らの課題としてタイへの貢献の活動に取組み始めました。彼らもまた、他者とともにある自分の幸福を見出したのだと思います。

そして、上記の学生達だけではなく、多くの皆さんが、教室・研究室で、地域で、そして課外活動で学び成長していく姿に、直接接することができましたことは、学長として最も嬉しく誇らしいことでした。地域の皆さん、卒業生の皆さんからも、「最近の和歌山大学生は、よく頑張っている」という声をかけられることが多くなりました。これも学長として嬉しく誇らしいことでもあります。

4年間の皆さんの成長の姿を見る時、2011年4月5日の入学式に述べた「皆さんのように過去の成功物語にとらわれない世代、『模索』の時代に育った世代こそ、過去を根本的に見直し、『未来の希望』を実現できる世代である」というメッセージを体現してくれていると頼もしく思い、本日確信をもって皆さんを社会に送り出せることを誇らしく思います。そして私は、皆さんの姿に励まされて学長職を全うできたことを率直に表明し、感謝をお伝えしたいと思います。



皆さんの成長は、皆さんの努力もあつてのことではありますが、「学ぶことの自由」「活動することの自由」が、社会によって保障されているからにはほかなりません。2014年ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの言を引くまでもなく、世界には「学ぶ自由」が保障されていない多くの青少年が存在

することを忘れてはなりません。そしてマララさんの言葉を使えば、「(受賞は) 終わりではなく、始まりに過ぎない」⁽¹⁾、皆さんの先輩たちの「学ぶ自由」を勝ち取る「始まり」

の結果として、皆さんの自由があることを忘れてはなりません。

本日このように「学ぶことの自由」の意味を強調するのは、「学習権は、人類の生存にとって不可欠な道具である」(1985年3月29日 第4回ユネスコ国際成人教育会議採択)という一般的意義だけでなく、今日「学ぶ自由」への抑圧の危惧を強く持つからであります。

皆さんは、「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という俳句を聞いたことがあるでしょうか。この俳句は、公民館の俳句創作サークルで、戦争体験のある高齢の女性が詠まれたものです。この俳句は、サークルの推薦により「公民館だより」に掲載されるはずでした。しかしこれを受け取った一職員の戸惑いと、この句は政治的争点に触れているという公民館長の判断により不掲載になりました⁽²⁾。また各地の美術館、博物館では、政治的争点に触れるという理由で展示への干渉の事例が生じております。大学も無縁ではありません。「朝日新聞」バッシングの中で、「朝日」の元記者が、大学を追われた、また追われようとした事例もあります。こうしたことは、かつてはなかったことであります。

「学びの自由」を含めて、私たちが今日享受している「自由」は、1945年8月の敗戦を経て制定された「日本国憲法」によって実現されました。

今年は戦後70年という区切りの年です。日本および日本国民は、かつての戦争に対していかなる態度をとるのか、同じ敗戦国にあったドイツとの比較においても注目されています。

私は、本日卒業生を送るにあたり、戦中において、当時の学長(校長)は、どのようなメッセージを卒業生に贈ったのかを調べてみました。残念ながら本学(当時は師範学校、高等商業学校ですが)の資料は見つけることができませんでしたが、和歌山高等商業学校初代校長 岡本一郎先生の、転任先である山口高等商業学校における、昭和16年12月28日の「本科第三十五回卒業式校長告辞」を見付けることができました⁽³⁾。

本来17年3月に行われるべきものが、12月8日の日米開戦もあって、3か月繰り上げて挙行された時のものです。

この「告辞」の中で、岡本校長は、「之等學徒の在學中一旦延期せられて居た徴兵検査も、已に現に之等の大多数の者に嚴正に執行され、其殆んど全部が検査に合格し、明十七年二月には夫々ペンを擲って劍に執り代へ、帝國軍人として君國の守りに就くことになつて居るのであります。」「思へば實に血湧き肉躍るの感あらしむるのであります。此時此際之等の卒業生は勇んで此御仲間となり得る光榮を有すのであります。かく考へますと今度の卒業式程重要な意義を含める卒業式は又とないのではないかと思はるゝのであります。父兄の御方々來賓各位、どうか之等のことを思ひ遣つて大に祝福し、大に激勵を加へて戴き」と述べられています。

こうした告辞を述べられた岡本校長を、12月8日開戦当日訪ねた山口高商の教え子の

記録が残っています。彼によれば、岡本校長は、欧米の力を熟知し、戦争の行方を心配し「さめぎめと涙」を流したということです。岡本校長の当時の心情、判断を察することはできませんが、すでに本日の私のように「学ぶ自由」の大切さを卒業生に伝えることのできる状況にはなかったことは明らかであります。

私は、長い研究生生活の中で、「生涯学習の自由」「表現の自由」「報道の自由」が、市民の幸せ、社会の平和と深く結び付いていること、そして自由の侵害は、個人の幸福と社会における民主主義を阻害・抑圧することを学んできました。

本日卒業する皆さんには、これから市民として、自らの幸福を追求するとともに、「自由の抑圧」に抗し、民主主義の発展のために尽力して頂きたいと思います。もちろん、私も終生の課題として取り組む決意です⁽⁴⁾。

さて、皆さんにとって、和歌山大学は母校であります。私は、皆さんの入学時、「和歌山大学は、生涯あなたの人生を応援します」と、卒業後の「あなた」も応援することを約束いたしました。その約束を果たすためには、和歌山大学そのものが存在し続けることが必要です。

今、国立大学法人の第3期中期目標期間（2016年から6年間）における運営費交付金等の配分の制度設計に関わる議論が、政府内で行われています。法人化後、政府は、財政的効率化や、産業競争力強化に資する研究への資金の選択と集中を企図してきました。しかしこの議論においては、「地方国立大学」「地方自治体」「地方の企業・経済界」の視点が顧慮されていないように思われます。

現在の作業中の枠組みが現実化するならば、誤解を恐れずに言えば、早晚地方国立大学は衰弱し、ひいては日本の高等教育のシステムが崩壊に至るのではないかと思います。いまこの事態の深刻さを憂慮され、本学経営協議会外部委員の皆さまは、現在進行する作業に疑念を表明されました⁽⁵⁾。本学の呼びかけに応え、山形大学、福井大学、福島大学、奈良教育大学、東北大学、高知大学、静岡大学等から同様な意見表明がされています。「地方創生」というスローガンのもとに、真に地方・地域の再生を実現しようとするならば、地方国立大学の財政的基盤を充実させることによって、人文社会科学を含めて多彩多様な研究に支えられた高等教育を実現し、皆さんが、和歌山という地方、地域で多くを学び成長されたように、都市の若者が地方に還流し、学ぶ機会とその体制を整備することこそ重要だと思えます。和歌山大学が基盤としている紀伊半島南部は自然豊かな、日本の未来にとって価値ある国土です。また人間性を見失う都市環境とは違って「ヒト」を人間として形成する機能も豊かです。

幸い、このたび和歌山大学の基盤を強化するために、来賓として御臨席頂いています和歌山大学後援会、同窓会を含むオール和歌山大学の組織を近く発足させることになっております。卒業生の皆さんには、自らの和歌山大学での学びの体験、その価値を社会に発信

するとともに、本学の存在基盤を確固たるものとする活動に参加して頂きたいと思います。私もまた和歌山大学OBとして皆さんとともに、和歌山大学の基盤強化のために尽力をするつもりです。

さて、私は、本年3月末をもって学長を退任し、同時に38年間に及ぶ和歌山大学生生活を終えます。大学入学以来でいえば、48年間、大学という舞台で多くの方に出会い、学び、励まされてきました。この場をお借りいたしまして、皆さまに深い謝意を表したいと思えます。

最後に、本学は、今後も「和歌山大学は、生涯あなたの人生を応援します」というメッセージ通り、教職員は勿論のこと、全国各地にいる同窓会の諸先輩方とともに、卒業後も皆さんを応援する、とりわけ<学び続けること>を応援することを重ねてお伝えし、式辞といたします。

2015年3月25日

和歌山大学長 山本 健慈



- (1) ノーベル賞受賞後の記者会見での発言
- (2) 佐藤一子「公民館における政治的中立と学習・表現活動の自由」『月刊社会教育』2014年10月号(国土社刊)
- (3) 岡本一郎氏の和歌山高等商業学校第1期卒業式告辞(大正15年3月)は、2013年3月26日の本学卒業式で紹介した。
- (4) 山本健慈「『生涯学習の自由』への闘い・・・決意を込めて」『和歌山大学生涯学習ニュースNO.43』(2015年1月1日)
- (5) 和歌山大学は経営協議会外部委員声明「地方国立大学に対する予算の充実を求める声明ー第3期中期目標期間に向けてー」(2015年1月6日)、および和歌山大学声明「ー我が国の高等教育の将来の成長と地域の発展に向けてー」(2014年1月9日)参照。https://www.wakayama-u.ac.jp/post_711.html
また「国立大交付金見直し『国民的議論を』」朝日新聞2015年3月20日